

カキの整枝せん定に関する研究

(第1報) 主幹の取り扱い方法と干害程度について

森田 彰・浜地文雄

(福岡県立園芸試験場)

MORITA, A. and HAMACHI, F.

Studies on Training and Pruning of Persimmon Trees.

(I) The effect of some treatment for the trunk on the degree of drought injury.

福岡県の富有カキの整枝法は、10数年前から変則主幹形整枝がほとんどで、土壌条件にめぐまれている関係で旺盛な生育をしている。それでこの旺盛に生育している変則主幹形整枝の方法を確立するため1966年から試験を行なっている。

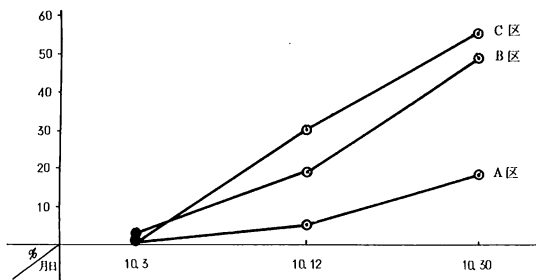
今回は1967年異常干害を受け、主幹の取り扱い方法によって干害程度に差を生じたので報告する。

試験方法

供試樹は富有を用い、株間4.5×9.0mの並木植で、1区1樹2回反復とした。試験区は直上している主幹の延長を栽植7年目に誘引し最上段の主枝にしたA区、主幹を目標位置まで栽植7年目に1度に切り下げたB区、漸次切り下げのため主幹部の側枝を切り込んだC区の3区を設けた。

試験結果および考察

1. 1967年の降水量は7月10日から10月25日まで



第1表 収量および品質

処理区	収量		一果平均重	3S以下	へタ焼果
	果数	重量			
A区	530ヶ	77.4Kg	146g	43.0%	0.5%
B区	449	64.2	143	44.5	0.3
C区	474	66.0	139	54.3	2.3

の間に169.8mmで、平年にくらべて、433.5mmも少なかった。(福岡気象台)。その結果、9月末から葉の萎凋落葉、果実の萎縮を起した。

2. 異常干ばつによる早期落葉は、B区およびC区にくらべてA区が少なかった。

3. 11月中旬には、いずれの区もほとんど落葉した結果1果重は処理間に差がなかった。

4. 翌年の結果母枝当り総着蕾数はB区が最も多く、次いでC区でA区が最も少なかった。これは異常干ばつの影響もあるが、A区は樹勢が強い関係で若干多く結果させたことによる影響の方が大きいと考えられる。

5. 4月下旬から5月上旬の落蕾はA区が少なく、B区、C区が多い傾向にあった。これは異常干ばつによるものと考えられる。

第2表 母枝当り着蕾数

処理区	結果母枝の長さ	総着蕾数	落蕾数	健全全数	結果目標数
A区	30cm以上	3.5	0.7	2.8	2.3
	20~30	1.4	0.2	1.2	1.4
	10~20	0.6	0	0.6	0.9
B区	30cm以上	5.6	0.5	5.1	2.4
	20~30	3.5	0.5	3.0	1.5
	10~20	2.0	0.4	1.6	1.0
C区	30cm以上	4.9	0.7	4.2	1.8
	20~30	3.2	0.5	2.7	1.1
	10~20	1.5	0.3	1.2	0.8

(注) 結果目標数は20葉当り1果とした。